

「子どもの貧困」とは？

D-YCAP 理事
横浜市立大学名誉教授
齊藤 毅憲

「子どもの貧困」という言葉がよく使われている。しかし、聞いたたびに、そして活字で見るたびに、“違和感”を感じる。子どもを育てている親や大人が貧困なので、子どもに使えるお金が少なく、子どもができる機会や場がなくなっているのは、当然のことながら理解できる。その結果、大人の中に見られた「格差社会化」が子どもの世界に及んできているのである。それは、とても由々しいことであり、解消の方策を講じなければならない。戦後の高度成長期以降、「一億総中流化」が言われ、格差の少ないのが日本の良さであったはずである。

親の手助けをして働かなければならず、学校にいけない子どもも多くいた時代には、子どもの貧困(低賃金)はあったのかもしれないが、子どもの権利が守られている現代は、子どもは働くことはないようになっている。要するに、親が貧困なのであり、子どもには貧困という言葉は使ってはいけないと考える。

親が貧困なので、そのもとで育つ子どもが大変な状態に置かれているのが、その意味なのである。「貧困(状態)の子ども」のほうが正しい言いかたになるであろう。それにしても、かつて総中流化の再生は難しいのであろうか。企業経営者や政策策定者などの力が今こそ問われていると思っている。 (2017,6,28)

【参考】

内閣府ホームページから「子供の貧困対策」について

<http://www8.cao.go.jp/kodomonohinkon/index.html>